

子どもの現状と次世代育成について

成 田 朋 子

I はじめに

近頃さまざまな場面で「子どもが病んでいる」という言葉が聞かれるようになったと思われるが、そもそも現在を生きる子どもたちは本当に病んでいるのであろうか。もし病んでいるとするならば我々大人は何をなすべきなのであろうか。

以上のような問題意識をもって、まず、近い将来子どもたちを保育・教育、さらに養育することになるであろう学生たちに子どもが病んでいるかどうかについて考えさせることにした。その結果を基に、子どもたちの置かれた状況について考え、次の世代を育てるために何をなすべきかについて考察したいと思う。

II 学生のレポートから

病んでいるという言葉については、例えば文献検索を行った限りにおいても、「日本は病んでいる」「学校は病んでいる」「テレビは病んでいる」「子どもたちは病んでいる」「子どもは身体も病んでいる」「慢性疾患を病んでいる児」等々、様々な分野で、様々な用いられ方がされていることがわかる。

では、子どもたち同様病んでいると言われる若者たちの中でも、保育や子どものことを学びつつある学生たちは、「子どもが病んでいる」と言われることについてどのように感じ、考えているのであろうか。

そこで、筆者が発達心理学関連の講義を受講している学生に、「時折“子どもが病んでいる”という言葉が聞かれますが、あなたはどう思いますか。病んでいるとするならその原因はどこにあると思いますか。また、その状況に対して大人はどのように対処すればよいと思いますか。」という問題設定に対するレポート提出を求めた。学生は、グループ 1 (本学 2 年生 12 名)、グループ 2 (本学専攻科保育専攻 1 年生 7 名)、グループ 3 (本学専攻科保育専攻 2 年生 7 名)、グループ 4 (A 大学、

主として 3 ないし 4 年生 20 名) 計 48 名である。

(1) 病んでいると思う学生の割合

まずレポートの記述を読み取って、子どもが病んでいると考えている学生、病んでいないと考えている学生の割合を集計し、表 1 に示した。

表 1 子どもが病んでいるかどうかに対する学生の考え
——人数と割合(%)——

	病んでいる	わからない・NA	病んでいない	計
グループ 1	11 (78.6)	2 (14.3)	1 (7.1)	14 (100)
グループ 2	4 (57.1)	0	3 (42.9)	7 (100)
グループ 3	6 (85.7)	1 (14.3)	0	7 (100)
グループ 4	12 (60.0)	3 (15.0)	5 (25.0)	20 (100)
計	33 (68.8)	6 (12.5)	9 (18.8)	48 (100)

表の結果は、グループによるばらつきはあるが、いずれのグループでも一番多い度数は「病んでいる」のカテゴリーへの分布である。全体で 68.8% の学生が「病んでいる」と答えており、多くの学生が現在の子どものたちの状態を病んでいると捉えていることがわかる。

しかしながら、「病んでいる」「病んでいない」と言い切っている学生がいる一方で、かなりの学生は判断に苦慮したようであり、それは「奥底では病んでいる」「(病んでいないのに) 病んでいると見られている」「病むように育てられている」「病んでいるのは子どもを育てる親や先生、学校」「少し嫌なことがあったら簡単に病んでいると言ってしまう」「大人が病んでいて子どもはその影響を受けている」「大人、社会全体が病んでいることになる」「大人が子どもを理解できないからそう表現した」などの記述にあらわれている。

なお、回答の分布はグループ毎にやや異なっており、属性による違いを分析することも可能であるが、グループ毎の度数も少なく、分布の様態を分析することは本論の目的ではないので分析は行わないこととする。

(2) 病んでいる原因や対処についての考え

病んでいるかどうかに対する回答の他、そう判断した根拠は何か、病んでいる原因はどこにあるのか、またそれに対する対策についての回答をグループ毎に表2～5に示す。

① 病んでいるとはどういうことか

直接的に質問してはいないが、子どもが病んでいるかどうかを判断するためにいろいろ考えた跡がみられる。

病んでいるとはどういう意味か解らず辞書を引いたと書いた者もあり、辞書に記載されていた「病気にかかる、患う、心を悩ます、気にする」などを「病んでいる」と定義付けした上で判断した学生もいた。

「病気だけでなく、心配することも病んでいるという意味なら、心配する子どもは今の子どもに多いから、子どもは病んでいると言える」と書いた学生もいる。

また、人間らしさ — 自分を大切に思い、ヒトのことも大切に思い、一緒に生きていこうと努力すること — を失って病んでしまっていると述べた者も複数いる。さらに虐待を受けた子どもが自分を責めることも病んでいることになるとの記述もあった。

以上のことから、学生たちは、「病んでいる」とは身体的な病気に限らず、むしろ心の問題として捉え、患う、気にする、そしてなにより人間らしさを失ってしまった状態と捉えていると考えられる。

② どこで判断したか

子どもが病んでいるか否かを判断した根拠にふれた記述をみると、これまで自分自身が経験してきたこととマスメディアの情報とに大別できる。

前者は、幼稚園や保育所での実習をあげた者が多い。実習園で仮病を使う園児がいた、「今日は～(習い事)の日なの」と話しかけてくる子どもがいたなどの具体的な記述がみられた。その他には、兄弟・友人の家族等の様子、家庭教師・警備員のアルバイト、ボランティアでのふれ合いなどかなり詳細な記述がみられ、現在学習中のケースカンファレンス(大学院生の記述)などもあげられていた。また、自分自身の子ども時代と比較してという記述もあった。

後者については、テレビ・新聞等マスメディアで報道される情報による判断で、犯罪の若年化、少年犯罪の劣悪化などの言葉が散見された。

③ どのような状態を病んでいると考えているか ()内の数字は複数の学生が同じ回答をしていることを示す)

事象を取り上げたものとして、不登校(3)、非行、薬物依存、リストカット、犯罪、引きこもり(2)、心身症(2)、拒食、親に対するストレスから、かっとなってキレタように犯行する状態、動機なき殺人、被虐待児等の言葉があげられている。

子どもの状態にかかわる言葉として、無気力、忍耐力の弱さ、適応力の弱さ、元気がない、疲れやすい、起きづらい、学校で生きづらい、家でもほっとできない、わかっているが我慢できない、集中力の無さ、外で遊べない、生活リズムの崩れ、体力の低下(2)、工夫しない、情緒不安定、心に病を抱えている、心に問題がある、心が病んでしまい社会に適応できなくなっている、心に闇、常に緊張し安らげる場所がない、接し方がわからない、信頼関係が築けない、ごく少数の子どもであるが何を考えているかわからない、子どもらしくない、いい子でいようとする子、大人びた態度や考えの子、家でいい子園で発散、大人に本音を言えない、道徳心の未発達、いけないことを平気でしたり、言うことをきかなかったり、していいことと悪いことのわからない子、などがあげられている。

④ 病むことの原因

なぜ子どもが病んでしまうのかについてその原因を述べさせたのであるが、病んでいないと回答した学生の場合も、病んでいると回答した学生同様いくつかの原因をあげていた。彼らは、子どもが病んでいるとは思わないが、子どもが病む原因として考えられる事柄をあげたものと思われる。

まず、子どもの側の要因として、子ども自身の心の弱さ、心のゆとりを失っている、愛されていない、必要とされていないと自分の存在を否定された気持ちになっている、安心感がもてない、家庭や施設でのストレス、寂しさ、無気力、忍耐力、適応力の弱さ、感情表現が上手くない、乳幼児期からの成長、子ども自身の気質や性格、感情のコ

ントロールができず他のものや人に矛先がむいてしまう、道徳観念の低下（万引きも遊び感覚）などがあげられている。

多くの学生は、子どもにも原因はあるだろうけれども周りの大人や環境にその原因を帰し、「病んでいるのは周りの環境や大人である」と断言している学生も何名かいた。

記述された言葉としては、生育環境、特に親、親子のきずなの希薄化、高度成長で核家族化が進み、地域との関わりが希薄化し、親子関係がゆがんだ、地域社会が病み、大人が病み、子どもが病む、周りの環境や大人が病んでいる、周りの環境、特に親、親や環境、親や環境の影響、親の態度や行動、言葉遣い、子どもは変わっていないが、社会の変化に伴い、子どもを取り巻く環境が変化した、家族、環境、昔と今の子どもは同じだが置かれる環境が変化した、家庭、原因のすべては大人、原因のほとんどは周りの大人、親子の愛着形成がうまくいっていない、加害と被害の円環、生まれつきでなく、親との関係の中で作られていく、親子関係希薄化、親にも問題——親になれていない、心が不安定、叱れない、家庭の問題、子ども時代を保障しなくなった家庭、コミュニケーションをとれず子どものことがわからない親のため子どもは知らない間に多くの傷を持つが、親は気づかない、叱らない親、叱りすぎる親、叱ってばかりいる大人の生活スタイル、子どものことを知らない、育て方を知らなさすぎ、育てられ方によって病んでいるか病んでいないかが分かれる、育ちの過程でヒトとしての尊厳を保障されなかった、母親からきちんと愛情を受け取っていたか、しっかり抱きしめられていたか、父親も母親も疲れているため子どもはいつも緊張し、安らげる場所がない、親と子のコミュニケーションに問題があり、心の交流がなく、信頼関係がない、十分に適切な関わりをしていない、夜型社会に対する寛容さ、大人の子どもへの配慮、愛情が足りない、親やそれに代わる人達の無関心、子どもの内的なものに気づかない大人、子どもを一人の人間として見るができない、心の拠り所という役目を果たせていない、子どもの成長に満足していない、子どもを見放す、過度の期待をする、愛情をもてない親、子どもを無視した過度の期待、虐待、模範となるべき大人の減

少、大人が大人らしくないから子どもが子どもらしくいられない、親の生活習慣に合わせた生活——親が朝食をとらないから子どもも食べない、食事は食べたい時に食べるのが普通だと思っていたという声が聞かれた、等多岐にわたっている。

直接親子関係に係わること以外に関しても、環境（遊び、友達関係、近所付き合い）の変化、子どもをきちんと見ない時代背景、ヒトとヒトとの関係が狭くなっている、大人の強要、テレビゲーム、夜子どもを居酒屋へ連れて行くことを許す社会や周りの大人、通信手段の発達、テレビ、雑誌類、周囲の人達との係わり合いが希薄化し、地域近所のふれあいが減り、家族構成員も減り、親も多忙で、その結果一人遊びが増えた、自然がなくストレスを発散できない、機械漬けで対人スキルやコミュニケーション能力が育たない、テレビの影響——対人関係（対人スキルやコミュニケーション能力の形成に影響）、遊び、想像力に欠ける、脳への影響、子どもの遊ぶ場所である公園が子どもだけで遊ぶ場所としては安全でないと考えられるようになり、体力低下、ストレスに対する抵抗力が低下、早期教育による変化として、人間関係を結べない、社会のルールを知らない、学校外の学習時間や室内遊びの増加による外遊びやスポーツ活動の減少、手軽な遊び場の減少、学校外の仲間の減少、集団で外遊びをしていたのが、室内で一人遊びに代わった、遊び場減少、テレビやテレビゲーム、遊びの変化、外遊びの減少、子どもの生活環境の変化——社会のお客様になってしまった、機械化の進行や携帯の普及で子ども自身気持ちに気づかなくなっている、学歴社会、環境が病んでいる、教育制度や社会のあり方、人間的な教育、いじめ、学級崩壊、友人関係、塾や習い事で忙しくほっとする時間がない、社会が病んでいて、その社会に対応していくために変化、学校でも子どものことをきちんと理解しないで間違った接し方をしている、学校のゆとり教育により週休2日制となり、部活時間増加、宿題増加、内発的に考えられなくなった、など多くの言葉や文を拾うことができた。

学生たちは、子どもが病んでいる原因は子どもの側にもないわけではないが、周りの大人、特に親と環境に尽きると考えていることがわかる。ま

子どもの現状と次世代育成について

表2 グループ1の回答

回答者	病んでいるか否か	判断した根拠	病んでいる状態とは	原因	対策
YK	病んでいるのでは		拒食、引きこもり、不登校、心身症	<ul style="list-style-type: none"> 大人が心のゆとりを失っている 子ども：愛されていない、必要とされていないと自分の存在を否定された気持ちになる 子どもが安心感を持ってない（安心感を持つことができるとのびのび育つ） 	<ul style="list-style-type: none"> 親：過度の期待をしない、しつけすぎない 保育者：子どもの保育だけでなく母親も守る 社会全体で母親を守りサポートする必要性 保育者は子どもやおかあさんに代わって社会に働きかける
AM	病んでいる	幼稚園実習で仮病を使う子どもがいた	病気にかかる、患う、心を悩ます、気にする	<ul style="list-style-type: none"> 大人の生活習慣に合わせた生活 <ul style="list-style-type: none"> 親が朝食をとらないから子どもも食べない 家庭や施設でのストレス、寂しさ 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な大人と環境を変える
MY	病んでいる		無気力、忍耐力の弱さ、適応力の弱さ	<ul style="list-style-type: none"> 無気力、忍耐力、適応力の弱さ <ul style="list-style-type: none"> これらは生まれつきではない、日常の親との関係の中でつくられていく 環境 	<ul style="list-style-type: none"> 保育者も自らの心と身体を健康に保ち、精一杯子どもたちとかかわる
AI	病んでいる	幼稚園実習 家ではいい子で園で発散する子どもがいた	わかっているが我慢できない 集中力がない	<ul style="list-style-type: none"> 家庭の問題 社会や周りの大人に原因 <ul style="list-style-type: none"> テレビゲーム、夜居酒屋に子どもを連れて行く コミュニケーションとれず、子どものことがわからない <ul style="list-style-type: none"> 親：子どもは知らない間に多くの傷：親は気づかない 	<ul style="list-style-type: none"> 周りの大人が気づき努力する 地域、園、家庭の連携
MT	(ほとんどの子どもが) 病んでいる		いけないことを平気でしたり、言うことをきかない していいことと悪いことがわからない	<ul style="list-style-type: none"> 親が親になれていない、心が不安定、叱れない 子ども時代を保障しなくなった家庭 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもに不安を与えない いけないことをきちんと教える
MS	(奥底で) 病んでいる		いい子でいようとしたり 大人びた態度や考えの子	<ul style="list-style-type: none"> 叱らない親 叱りすぎる親 周りの環境や大人が病んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもを癒すだけではダメ、親の心を軽くできるよう 家族は心も身体も包み込む存在：子どもを愛情で包み込む
MW	NA	教育実習	外で遊べない	<ul style="list-style-type: none"> 周りの環境 特に親 <ul style="list-style-type: none"> 子どものことを知らない、育て方を知らなさすぎ 	<ul style="list-style-type: none"> 親準備性、子育て準備性を育てる 親を支える 子どもの側に立てる大人が子どもの生き辛さを一緒に担う決意をし、一緒に歩いていく
YM	病んでいる (実習で病んだ子はいなかった)		病気、心配する	<ul style="list-style-type: none"> 時代背景 子どもをきちんと見ていない 	<ul style="list-style-type: none"> 周りの大人が変わる <ul style="list-style-type: none"> 子どもをよく見る、話を聞く、こどもを一人の人

	が、問われると病んでいる)				間として見る
YI	病んでいる			・親や環境	・失敗する権利 ・親の身勝手な意志だけで子どもの成長を妨げない
MH	病んでいる	実習		・親の影響 ・環境の影響 育てられ方によって病んでいる子、病んでいない子に分けられる	・保護者が子どもと関わる時間をしっかり持つ ・夫婦の協力・助け合い、子育て支援センターを有効に利用する ・家庭環境の差で子どもが病まないよう保育者がサポート
MH	病んでいる (人間らしさ—自分を大切に思い、人のことも大切に思い、一緒に生きていこうと努力する部分—が病んでしまっている)			・感情表現が上手くない ・育ちの過程で人としての尊厳を保障されなかった ・母親からきちんと愛情を受け取っていたか、しっかり抱きしめられていたか	・愛情をたっぷり注ぎ、しつづけをきちんとする ・しつづけができてから社会に出て教育を受ける ・大人の役割：子どもを見捨てない、根源的な病を直す、人間らしさを思う存分出せる時間、つまり十分愛され、自分を表現でき、自然とたわむれることができ、友達と遊びまわることができる時間をたっぷり作る ・保育者はサポート
AN	よくわからない		虐待を受けた子どもが自分を責めることも病んでいることかもしれない	・親や周りの環境 ・親の態度や行動 言葉遣い ・テレビや雑誌類	・自分自身のことを大切に、周りの人も大切に思える環境をつくる ・親や周りの人が温かく見守る
YS	病んでいる (病んでいるのは子どもだけではなくまわりの大人も)			・父親母親とも疲れていて子どもは常に緊張し、安らげる場所がない	・子どもの心を知るために3つの柱—事実・気持ち・考え—を聞く
MM	病んでいない (病んでいると見られている)		大人に本音を言えない	・病むように育てられている ・地域社会全体が病み、大人が病み、子どもが病む	・子どもの声を聞く

表 3 グループ 2 の回答

回答者	病んでいるか否か	判断した根拠	病んでいる状態とは	原因	対策
NI	病んでいる	講演の HP	心を病んでいる 不登校、非行、薬物依存、リストカット 心の病を抱えている	・叱ってばかりいる大人の生活スタイル	・話を聞くこと ・寄り添って考える ・過去と今を認めようえでしっかりほめる
YI	病んでいる		心に問題がある	・高度成長	・心の教育、心の子育てが強い

子どもの現状と次世代育成について

			接し方がわからない 信頼関係が築けない	核家族、地域との関わり希薄化 ゆがんだ親子関係 ・自然なくストレス発散できない ・機械漬けで、対人スキルやコミュニケーション能力が育たない	調されるが、大人の意図的な教育ではダメ ・安全な空間、自由な時間、豊富な遊び仲間が自然に与えられるように ・そのために母親が子どもの安全基地になる ・子育てサービスを母自身が選べるように ・子どもが安心して遊べる環境、時間、自然に触れ合える場所を提供
SK	病んでいる	テレビ		・TVの影響 対人関係－対人スキルやコミュニケーション能力の形成に影響 遊び－想像力欠ける 脳への影響	・ノーテレビデー ・メディアに向き合う姿勢を主体的に
KF	おおそ病んでいる－病んでいるが、0～6歳の子どもは病んでいない	マスコミ報道実習		・乳幼児期からの成長が原因 ・原因はすべて大人	・乳幼児期に家庭でしっかり愛情を注ぐ。これが可能になるようまわりの大人がその家族を支援する必要 ・子どもの心に潜む悩みや不安に共感し、受容できる大人の存在が必要－他人でも信頼できる大人や専門家必要
AS	病んでいない	実習園の子ども （「今日は～の日なの」という子どもはいたが。） 社会の変化に伴い、子どもを取り巻く環境は変化したが、子どもは変わっていない	体力低下 ストレスに対する抵抗力低下 人間関係を結べない 社会のルールを知らない	・子どもの遊べる場所 公園が子どもだけで遊ぶ場所としては安全でないと考えられるようになり、体力低下・ストレスにたいする抵抗力低下：病んでいると言われる原因の1つ ・早期教育による変化 人間関係を結べない、社会のルールを知らない子ども ・幼稚園、家庭、地域で生活体験が乏しく、自然を学んできていない	・幼稚園、家庭、地域で、直接的に感じて学べる時間を奪わないように子どもを見守る
KB	病んでいない			・生活リズムの崩れ ・体力の低下 これらはS60年頃から続いている ①学校外の学習時間や室内遊びの増加による外遊びやスポーツ活動の減少 ②手軽な遊び場の減少 ③学校外の仲間の減少、少子化 ・原因を作っているのは大人	・大人の生活リズムを改善し、子どもの生活を安定させる

SS	病んでいない (病んでいるのは幼児ではない。 病んでいてほしくないという願望も否めない	保育現場の子ども：盛んにごっこ遊びをしている、外で身体を動かして遊んでいる：病んでいるとは感じられない	工夫しない 体力低下	<ul style="list-style-type: none"> 外遊び、集団→室内、個人へ 遊び場減少 テレビ 原因はすべて大人 	健全な子どもたちの姿が当たり前となるような保育を心がける
----	---	---	---------------	---	------------------------------

表 4 グループ 3 の回答

回答者	病んでいるか否か	判断した根拠	病んでいる状態とは	原因	対策
TM	病んでいる	マスコミ報道	心の交流がなく、信頼関係ができていない	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの問題だけでなく親子間の問題 周りにいる大人、特に親と子どもの間のコミュニケーションに問題があるため 子どもとどう関わったら良いかわからない親が増えている 子どもの道徳心の未発達 大人の夜型社会に対する寛容さ 	<ul style="list-style-type: none"> 大人は自分の考えを押し付けず子どもと心を向き合わせて話し合うことが大切。お互いの考えを伝え合い、子どもを尊重し、信頼し、子どもの人生は子どものものであることを認識する。 保育者：大人の役割について保護者に伝える 社会背景を把握し、保護者を援助 大人と子どもの心の交流を大切にし、子どもの人生を尊重する、道徳心を育てる
RS	病んでいる	動機なき殺人		<ul style="list-style-type: none"> 人と人との関係が狭くなっている 	<ul style="list-style-type: none"> 人と人のかかわりを増やすより多くの他者とかかわれる環境をつくる その中でたくさんのことを体験し、感じ、共感する 一人の人と信頼関係をしっかり築き、そこから信頼関係を築く幅を広げ、視野を広げる
TK	病んでいる		人間らしさ—自分を大切に思い、人も大切に思い、共に生きていこうと努めるといふこと—を失っている	<ul style="list-style-type: none"> 子ども自身の気質や性格もあるが、環境が与える作用、つまり大人の子どもの配慮、愛情が関係している 加害と被害の円環 少子高齢化社会、国の負債：国が病んでいる、社会が病んでいる：大人が病む、子どもが病む 	<ul style="list-style-type: none"> 国民ひとりひとりの人格形成を考える
TK	病んでいる (病んでしまう)			<ul style="list-style-type: none"> 子どもをとりまく環境が病んでいるから子どもも病んでしまう 子どもの生活環境の変化 社会のお客様になってしまった 	<ul style="list-style-type: none"> 周りの環境を変える→子どもの心も変わる→子ども自身も変わっていく コミュニケーションをとる、愛情を注ぐ、ストレスを発散できる場所を与える こどもを受け入れる 子どもとの時間を大切にする

子どもの現状と次世代育成について

RH	病んでいる		感情のコントロールができず他のものや人に矛先がむいてしまう	<ul style="list-style-type: none"> 誰にでも病むことはあるが、大人は解決する力をもっている 子ども自身の心の弱さ 機械化の進行 携帯 子ども自身自分の気持ちにきづかなくなっている 学歴社会 	<ul style="list-style-type: none"> 信頼関係を築き、自分を出せる場所を作る 子どもの心のよりどころになる
TH	病んでいる (社会全体が病んでいる)		心が病んでしまい社会に適応できなくなっていく状態	<ul style="list-style-type: none"> その子を取り巻く環境が病んでいる 	<ul style="list-style-type: none"> 学校改革で子どもが救われる制度を作り直す 家庭で安心できる生活の場を作っていけるよう両親と話し合い見直す 保育者：心を閉ざそうとする子ども、家庭を援助する
AO	NA		心が病んでいる＝情緒不安定（人的環境によって子どもの心の状態が左右される）	<ul style="list-style-type: none"> 食事の乱れ 食べたい時間に食べるのが普通だと思っていたという声 子どもの心が安定し、心の拠り所になるはずの家庭がその役目を果たせていない 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの日々の変化に目を向けて、話し合うことで子どもの心の状態を把握する言葉、スキンシップ、コミュニケーション

表5 グループ4の回答

回答者	病んでいるか否か	判断した根拠	病んでいる状態とは	原因	対策
JA	病んでいる	犯罪の若年化		<ul style="list-style-type: none"> 親が子どもの成長に満足していない、見放す、過度の期待 遊びの変化 外遊び減少、ゲーム 教育制度や社会のあり方 人間的な教育が必要 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭：子どもの成長を受け入れる、過度の期待をしない愛情を注ぐ 学校：人間性を重視した教育、道徳的な面に重点をおいた授業 社会：子どもたちと対話 社会全体が子どもとより積極的な関係を築いていく
KI	病んでいる		元気がない、疲れやすい、起きづらい、学校で生活しにくい、家でもほっとできない	<ul style="list-style-type: none"> いじめや学級崩壊、友人関係 塾や習い事で忙しくほっとする時間がない テレビゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもと正面から向き合い、コミュニケーションをはかることにより子どもの気持ちや態度の変化に気づく
YK	病んでいる		少年犯罪の劣悪化 (増えていないが)	<ul style="list-style-type: none"> 親子の愛着形成が上手くいっていない 	<ul style="list-style-type: none"> 愛あるふれあい 血のつながりにとらわれず子どもに愛を与える 病んでいる子どもは生まれつき病んでいるわけではないことに気づく
HK	病んでいる		(多くの子どもは元気に成長しているが)	<ul style="list-style-type: none"> 原因のほとんどは周りの大人 愛情を持ってない親 子どもを無視した過度の 	<ul style="list-style-type: none"> 大人が自分をしっかり持ち、子どもに愛情をたっぷり注ぐ まず大人を救う—自分のご

			悩みを持つ心に闇を持つ	期待、虐待	く身近からできること
MT	病んでいる (社会環境の影響を受けている被害者)			<ul style="list-style-type: none"> • 社会が病んでいる 社会に対応していくために変化 	<ul style="list-style-type: none"> • まず病んでいる大人をケアしなければならない • 子どもの声をよく聞く
YH	病んでいる (病んでいるのは子どもを育てる親や先生、学校)			<ul style="list-style-type: none"> • 学校のゆとり教育で週休2日制になった結果一部活時間増加、宿題増加、内発的に考えられなくなった 	<ul style="list-style-type: none"> • 子どもばかりを見てはダメ、周りの環境を変える • 学校制度を変える • 定時に帰宅し家族と過ごす時間を増やす • 大人は子どもを信じてあげる
MM	病んでいる	自身の子どもの頃と比較	寂しさ、孤独感(子ども自身気づかないところで感じている)	<ul style="list-style-type: none"> • 周囲の人達との関わり合いが薄いものになりつつある • 地域近所のふれあい減、家族構成員減、親忙しい • 一人遊び増 	<ul style="list-style-type: none"> • 子どもと関わる時間を増やす • 会話をする
YM	病んでいる	警備員のアルバイト		<ul style="list-style-type: none"> • 道徳的観念低下 万引きが遊び感覚で • 親子の絆薄れてきた 	<ul style="list-style-type: none"> • 原点に立ち返って確かな愛情をもって育て、かけがえない大切な一人のヒトとして深い絆をもった関係を築く
AI	病んでいる	子どもが被害者、加害者のニュース		<ul style="list-style-type: none"> • 環境(遊び、友達関係、近所付き合い)の変化 	<ul style="list-style-type: none"> • 大人たちから状況を少しずつ変えていく • 近所の子どもたちと公園で遊ぶ
SI	病んでいる	不登校小中学生とふれあうボランティア	増加している犯罪、不登校、ひきこもり、心身症、被虐待児	<ul style="list-style-type: none"> • 両親や家庭が十分に適切な関わりをしていない • 学校でも子どものことをきちんと理解しないで間違っただけ接し方をしている 	<ul style="list-style-type: none"> • ごく普通でよい適切な関わり、子どものことを考えた関わり • 子どもと過ごす、愛情を注ぐ、叱るべきことははっきり、社会のルールを身につけさせる • 目に見える対処だけでは不十分で、本当に子どものことを思うこと
MT	病んでいる	友人の2歳の子ども 家庭教師先の姉妹(だからこそ輝こうとしている)		<ul style="list-style-type: none"> • 成育環境 • 親 	<ul style="list-style-type: none"> • 何でも話せる家庭環境を作る • 周りが親を諭す
MN	病んでいる (幅広い年齢において病んでいる)	大2、高2の妹		<ul style="list-style-type: none"> • 親やそれに代わるヒトたちの無関心 	<ul style="list-style-type: none"> • 子どもの変化に少しでも早く気づき、何らかの対応ができるよう近くで成長を見守る
TA	NA	マスメディアの情報	キレやすい	<ul style="list-style-type: none"> • 模範となるべき大人が減少してきた • 通信手段の発達 	<ul style="list-style-type: none"> • 子どもときちんと向き合い話し合いの場を設ける • 自我の発達を促し、ストレスから開放
AS	病んでいない		本当に悩んだり	<ul style="list-style-type: none"> • 大人が強要している 	<ul style="list-style-type: none"> • 子どもらしく育てる

子どもの現状と次世代育成について

	(本当に病んでいる子どもももちろんいる)		へこんだりして病気になるてしまふような様子(少し嫌なことがあつたら病んでいると簡単に言つてしまふている)		<ul style="list-style-type: none"> • 大人は胎児の段階から命を大切に、周リから支えられながら育てる
YY	NA	テレビ番組		<ul style="list-style-type: none"> • 親子の關係が薄くなつてきている 	<ul style="list-style-type: none"> • 家族の姿を子どもに見せる
YS	NA	ケースカンファレンス		<ul style="list-style-type: none"> • 家族、環境 	<ul style="list-style-type: none"> • 子どもの問題を明確にし、援助する
TI	病んでいるのではない(大人が病んでいて、子どもはその影響を受けている)			<ul style="list-style-type: none"> • 置かれる環境の変化(昔と今の子どもは同じ) 	<ul style="list-style-type: none"> • 環境を整える
TU	病んでいるとはいえない(ごく少数の子ども:病んでいる)		何を考へているかわからない	<ul style="list-style-type: none"> • 大人、社会全体が病んでいる • 家庭 	<ul style="list-style-type: none"> • 会話の時間 • 親が子どもを見て考へてあげることができるように
MK	病んでいない(大人が子どもを理解できないから病んでいると表現した)			<ul style="list-style-type: none"> • 大人は子どもの内的なものに気づかない • 大人は子どもを一人の人間としてみるができない 	
TI	病んでいない		子どもらしくない	<ul style="list-style-type: none"> • 大人 • 子どもが子どもらしくいられない(病んでいる)のは大人が大人らしくないから 	<ul style="list-style-type: none"> • 大人が変わらなければ根本的な対処にならない • 子どもと一番接する親、教師、保育士へのアプローチが大切 • 大人が子どものことをよく知つて受容するためにはどうすればよいかを学ぶことがこの事態への対処法になる

わりの大人が病んでいるために子どもが病んでしまつたと怒りに似た感情をもつて記述している者さえみられた。

⑤ どのように対処するべきかについて

病んでいると言われる今日の子どもの状況に対してどのように対処するべきかという問いに対しても多くの記述がみられた。親や身近な大人、保育者、学校、社会がどのように対処するべきかに大別できるので、その夫々についてあげてみよう。

i) 親、身近な大人はどうするべきか

子どもと係わる時間をしっかり持つ、過度の期待をしなない、しつけすぎない、子どもに不安を与えない、いけないことをきちんと教える、安心感を持ちのびのび育つことができるようにする、子どもに失敗する権利を認める、失敗を許す、子どもを愛情で包み込む、周リの大人在変わる——子どもをよくみる、話を聞く、子どもを一人の人間として見る、親の身勝手な意思だけで子どもの成長を妨げない、愛情をたっぷり注ぎ、しつけをきちんとする、しつけができてから社会に出て教育

を受けさせる、子どもを見捨てない、根源的な病を直す、人間らしさを思う存分出せる時間、つまり十分愛され、自分を表現でき、自然とたわむれることができ、友達と遊びまわることができる時間をたっぷり作る、暖かく見守る、子どもの心を知る、事実・気持ち・考えを聞く、子どもの声を聞く、話を聞く、寄り添って考える、過去と今を認めたくてでしっかりほめる、母親が子どもの安全基地になる、乳幼児期にしっかり愛情を注ぐ、子どもの心に潜む悩みや不安に共感し、受容できる大人の存在が必要（他人でも可）、自分の考えを押し付けず子どもと心を向き合わせて話し合う、お互いの考えを伝え合い、子どもを尊重し、信頼し、子どもの人生は子どものものであることを認識する、一人の人との信頼関係をしっかり築けるよう、コミュニケーションをとる、愛情を注ぐ、ストレスを発散できる場所を与える、こどもとの時間を大切にす、信頼関係を築き、自分を出せる場所をつくる、子どもの心のよりどころになる、子どもの日々の変化に目を向けて話し合うことで子どもの心の状態を把握する、ことば、スキンシップ、コミュニケーションに気をつける、子どもの成長を受け入れる、過度の期待をしない、愛情たっぷりに、子どもと正面から向き合い、コミュニケーションをはかることにより子どもの気持ちや態度の変化に気づく、愛あるふれあい、血のつながりにとらわれず子どもに愛を与える、病んでいる子どもは生まれつき病んでいるわけではないことに気づく、大人が自分をしっかり持ち子どもに愛情をたっぷり注ぐ、定時に帰宅し家族と過ごす時間を増やす、子どもを信じてあげる、子どもと係わる時間を増やす、会話をす（子どもたちは自分自身も気づかないところで寂しさや孤独感を感じている）、原点に立ち返って、確かな愛情をもって育て、かけがえのない大切な一人の人として深い絆をもった関係を築く、ごく普通の適切な関わり、子どものことを考えた関わり、子供と過ごす、愛情を注ぐ、しかるべきことは叱り、社会のルールを身につけさせる、目に見える対処だけでは不十分で、本当に子どものことを思うこと、子どもの変化に少しでも早く気づき、何らかの対応ができるよう近くで成長を見守る、子どもときちんと向き合い話し合いの場を設ける、自我の成長を促

し、ストレスから開放する、子どもらしく育てる、胎児の段階から命を大切にし、周りから支えられながら育てる、家族の姿を子どもに見せる、親が子どもを見て考えてあげることができるように会話の時間を、など列記できる。

ii) 周りの環境をどうするべきか

環境を整える、環境を変える、子どもばかりを見ているのではなく周りの環境を変える、周りの環境を変えて子どもの心を変える、何でも話せる家庭環境をつくる、(大人の意図的な教育ではなく)安全な空間、自由な時間、豊富な遊び仲間が自然に与えられるように、生活体験を豊かに、自然を学ぶ、直接的に感じて学べる時間を奪わないように子どもを見守る、自分自身のことを大切に、周りのヒトも大切に思える環境をつくる、大人たちから状況を少しずつ変えていく(近所の子どもたちと公園で遊ぶなどする)、周りの大人が気づき努力する、子どもの側に立てる大人が子どもの生き辛さを一緒に担う決意をし、一緒に歩いていく、夫婦の協力、助け合い、ノーテレビデーをつくり、メディアに向き合う姿勢を主体的に、大人の生活リズムを改善し、子どもの生活を安定させる、などがあつた。

iii) 保育者はいかにすべきか

将来保育者になる予定の学生が多いことから、保育者としてどのようにあるべきかについての記述も目立つた。

子どもの保育だけでなく母親も守る、子どもや親に代わって社会に働きかける、自らの心と身体を健康に保ち、精一杯子どもたちとかかわる、家庭環境の差で子どもが病まないようサポートする、サポート、健全な子どもたちの姿が当たり前となるような保育を心がける、(子どもとどう係わつたらよいかかわからない親が増えている)大人の役割について保護者に伝える、社会背景を把握し、保護者を援助、大人と子どもの心の交流を大切に、子どもの人生を尊重する、道徳心を育てる、心を閉ざそうとする子ども、家庭を援助する、などであつた。

iv) 学校はどうするべきか

学校に言及した意見もいくつかみられた。学校

制度を変える、学校改革で子どもが救われる制度を作り直す、家庭で安心できる生活の場をつくっていくよう両親と話し合い見直す、人間性を重視した教育、道徳的な面に重点をおいた授業、などであった。

v) 社会全体のあるべき姿

さらに広く、社会全体の問題として考えた意見もあった。

母親を守りサポートする必要がある、地域、園、家庭の連携、子どもを癒すだけではダメ、親の心を軽くできるように、親準備性、子育て準備性を育てる、親を支える、子育て支援センターの有効利用、子育てサービスを母親自身が選べる、子どもが安心して遊べる環境、時間、自然に触れ合える場所を提供、乳幼児期に家庭でしっかり愛情が注げるようにまわりの大人がその家庭を支援する、子どもの心に潜む悩みや不安に共感し受容できる信頼できる大人や専門家、人と人のかかわりを増やす、より多くの他者と係わる環境を作る、国民一人一人の人格形成を考えていく必要、子どもたちと対話、社会全体が子どもとより積極的な関係を築いていく、まず大人を救う（自分のごく身近からできること）、まず病んでいる大人をケアしなければならない、子どもの声を聞く、周りが親を諭す、子どもの問題を明確にし援助する、大人が変わらなければ根本的な対処にならない、子どもと一番接する親、教師、保育士へのアプローチが大切、大人が子どものことをよく知って受容するためにはどうすればよいかを学ぶことがこの事態への対処法になる、などかなり具体的な記述がみられた。

以上のように、学生たちの多くは、現在の子どもたちの状況は病んでいると言わざるをえないが、子どもが病んでいるというよりはまわりの環境、特に親が病んでいて、まわりの環境、中でも親が子どもを追いつめていてと感じているようであった。この状況に対しては、親・大人そして社会を変えていくことの必要性を感じていることもわかった。さらに社会全体が子どものことをもっと学ぶことの必要性を指摘している学生もいたのである。

Ⅲ 子どもが病んでいることについて

(1) 子どもの現状とこれまでに展開されてきた施策

子どもが病んでいるか否かについて学生にレポートを求めた結果は以上Ⅱに示した通りであるが、学生たちにとって子どもが病んでいるかどうかの判断は、どのような状態が病んでいる状態であるのかが明確に示されないまま判断することになり、いささか難しいと感じたようである。

「病んでいる」ことについて国語辞典には「病気にかかる」「病気に犯される」「悩ます」「心配する」などといった意味が記載されているが、マスコミ等では先に述べたように「日本は病んでいる」「学校は病んでいる」「テレビは病んでいる」「子どもたちは病んでいるのか」「子どもは身体も病んでいる」「慢性疾患を病んでいる児」などの用い方の例がある。最近では、保育の分野でも病んでいるという言葉が様々なところで用いられるようであるが、特別の意味が定義づけされているわけではなさそうである。

したがって、「学校は病んでいるか」というテーマでシンポジウムが開催された1998年度教育社会学会において、「学校が病んでいる」といった問題の語られ方（言説）が問題の本質を見えなくしているとの指摘がなされている⁽¹⁾ように、子どもたちの現状に病んでいるという言葉当てはめてそれで終わりとするのではなく、現代の子どものおかれた状況を真正面から受け止めて、子どもたちのために何をなすべきかを真摯に考えなければならぬと思われる。

ここで、子どもたちの様子を20年、30年の単位で振り返ってみると、確かに1970年代後半にはすでに、遊べない子ども、無気力な子ども、生活リズムの乱れた子どもの増加が指摘され、子どもの育ちに警鐘が鳴らされていたのである⁽²⁾。この状況に関して1978年『児童心理』臨時増刊号では「教育と家庭」という特集が組まれ、巻頭言——身体も心も病んでいる子どもたち——には「このごろの子どもたちの体は変質しているようだ。姿勢の悪い子どもたちが多し、……子どもたちは心も病んでいるのだ。自主的に何かをするという生活のないままに、……大学生たちのアイデンティティは拡散し、その精神は未熟である。ほんとうの教育とは何かを探究すべき危機的状況

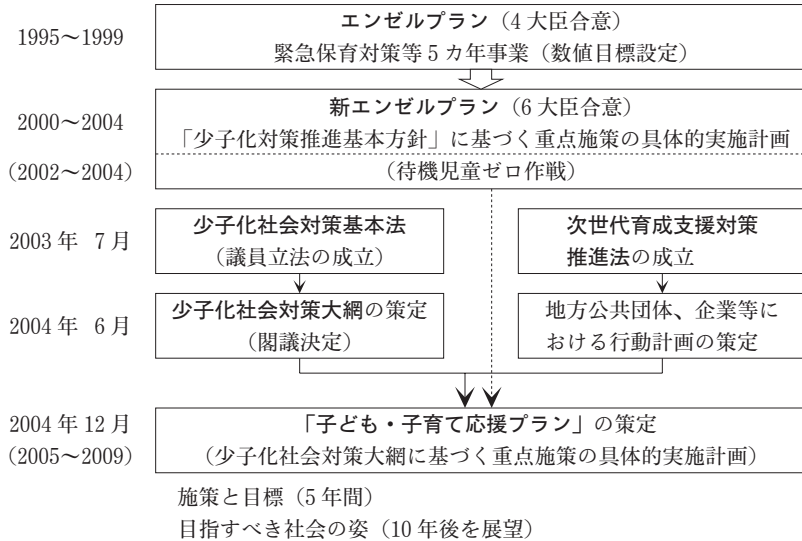


図1 少子化対策の流れ (保育白書 2005年版)

に、われわれは置かれていることを自覚しないわけにはいかないのである。」⁽³⁾と述べられている。

子どもたちの好ましくない状況はその後も続き、80年代中頃までは「特別な子」が問題を起こすと言われていたのが、80年代中頃を過ぎる頃からは「普通の子」が問題を起こすと言われるようになった⁽⁴⁾。

そしてこれら子どもの状況と平行して、問題は子どもの問題だけではなく、子どもを育てる親の側の問題も指摘され始め、特に育児に不安を抱く母親がクローズアップされるようになり、育児不安という言葉を生み出したのである。

このような子どもを取り巻く社会背景の中で、1990年代には政府は社会全体で子どもを育てていくという考えの下、様々な施策を展開させることになった。

1994年のエンゼルプランとそれに続く緊急保育対策等5カ年事業では、保育所の整備・拡充だけでなく、親の子育てで不安に対する対策・家庭での子育ての支援・子育てネットワークづくりについても、行政によって積極的に取り組まれることが計画された。このようにエンゼルプラン策定以降子育て支援という言葉がクローズアップされることとなり、子育てを支援することに力が注がれることになったのである。続く1999年策定の新エンゼルプランの内容は多様な保育サービスの展

開、在宅児もふくめた子育て支援を推進する拠点として地域子育て支援センターの拡充、仕事と子育てを両立しやすくするための雇用環境の整備等を目指すものであった。

ところが、保育対策を中心としたエンゼルプラン、新エンゼルプランは結果として少子化の解消につながらず、エンゼルプラン、新エンゼルプラン等の施策が少子化対策というレベルでのみとらえられていることの限界が指摘された。そこでもっと広い視野で施策を展開させる必要があるとして、2003年には次世代育成支援対策法が制定され、2004年12月には、保育事業中心から若者の自律・教育・働き方の見直し等を含めた幅広いプランへと転換を図る「子ども・子育て応援プラン」が策定されることになった。

以上の流れは図1⁽⁵⁾に示された通りである。

子ども・子育て応援プランは、基本的にはエンゼルプラン、新エンゼルプランを引き継ぐものであるが、保育事業中心から若者の自律・教育・働き方の見直し等を含めた幅広いプランへと転換を図り、10年後の目指すべき社会の姿をかけた、それに向けた5年間の施策と目標を示している。そこでの重点課題は、若者の自律とたくましい子どもの育ち、仕事と家庭の両立支援と働き方の見直し、生命の大切さ、家庭の役割等についての理解、子育ての新たな支え合いと連帯、の4つであ

子どもの現状と次世代育成について

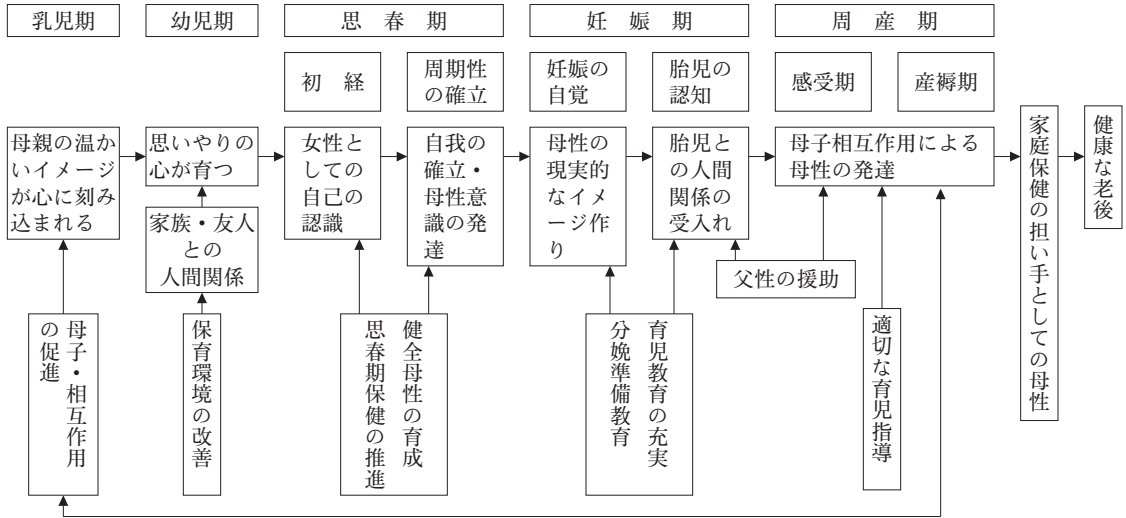


図2 母性の発達 (松本、1986)

る⁶⁾。即ち、これまでの施策が保育支援中心の施策に偏っていたのに対して、企業や地域など、広く社会全体の取り組みに重点を移していることに大きな特徴があると考えられる。

以上のように考えると、次世代育成支援対策法を契機に、これからの児童福祉の中心課題は子育て支援であり、それも直接的な子育て支援そのものに極限するのではなく、男性や企業も含めて、社会全体で支えあう体制の整備が必要であるという認識が社会に根付き始めたと言えるのではないだろうか。エンゼルプラン、新エンゼルプラン、子ども・子育て応援プランと、次々と施策が展開されてきたのであるが、このことは決して施策の失敗ではなく、いろいろの策定をくり返し、模索する中で一体何をすべきかがようやく明らかになってきたと言えるのではないだろうか。

では我々は具体的に何をすればよいのだろうか。

このことに関して某新聞コラム⁷⁾に子育てに悩みを抱えて相談に訪れた母親とカウンセラーの象徴的な言葉が紹介されていた。「なぜ子育てを教えてくださいなかつたの」「誰にでもできると思って」という会話である。

子育て不安が社会問題となっている今日、「誰にでもできると思って」とストレートに返答する相談員は少ないとは思いますが、個々の具体的なことながらに関しては起こりうる会話であろう。この母親は子どもを育てることについて学んでこなかつ

たと訴えているのである。

考えてみれば、「私たちが学校で学んできた教育には、受験に必要なノウハウはあった。しかしいつの日にか〈家族になるためのもの〉はなかつた。……家族と和解する方法、子どものしつけ、家事手伝いの方法、近所付き合いの方法はなかつた。……それらは、ある時までは、家族の中で、家族同士の間で語られ、また仕事を共にすることで、確実につたえられてきたことであつた」⁸⁾のである。

さらに、それらは「誰からも特に教えてもらえるわけではない。三世同居家族とかの仲で、その子ども時代を過ごした人は、多少なりとも見よう見真似でということもあるだろうが、そういう幸運に恵まれなかつたら、知らないままで過ぎてしまう」⁹⁾ことになるのである。

従って、「人類は環境の変化に合わせて自分たちの生き方を変えることで環境に適応してきた。家族のあり方もまた、社会変動につれて変わっていくのが自然なこと。新しい時代にあつた新しい家族の形を模索する最中にある」¹⁰⁾と述べられているよう、子どもをとりまく環境や子育て環境が大きく変化したと言われる今日、現在の環境に応じた子育てのあり方を模索しなければならないのである。「子育ての技術や能力は親になった途端に自動的にわいてくるものではない。少子化の影響で幼い子どもに慣れていない新米の親にとって、生まれたばかりの子どもを育てていくことは、免

許もないのにいきなり公道を走らされるのと同じようなもの」⁽¹¹⁾であろう。

消費者教育とか生涯教育とか、あるいは料理、育児、掃除、洗濯、収納の工夫から資産運用まで含めて「生活学」「生活術」「生活必需学」といったことばが生まれ、何処かで学習されるようになった⁽¹²⁾のであれば、次の世代を育てるという重要課題についても同様のことを考えてもよいのではないだろうか。

(2) 養護性、次世代育成力を学ばせる試み

前節で述べたよう、現代社会における子どもの健やかな成長・発達に係わる中心課題は子育て支援であるが、これからの児童福祉の問題は、直接的な子育て支援そのものに局限するのではなく、男性や企業も含めて、社会全体で支えあう体制をいかに整備するかということである。

企業では数値目標を掲げた取り組みがなされ、地域でも様々な試みが行われるようになった。その一つとして世代間交流の意義が唱えられ、保育所および幼稚園園児と中学生・高校生、園児・小学校児童と地域の高齢者間のふれあいの機会がもたれるようになった。さらには次世代を育成する観点から、中学生と大人たちが出会う機会が少ないことが指摘されはじめ、中学生と大人たちがふれあうための試みも始まっている⁽¹³⁾。また世代を超えて家族の絆、子育てについて考えようという講座も学習センター等で開設されるようになった。いずれも、全ての年代に、生きていくための力、養護性、次世代育成力を身につけてもらうための試みと言えよう。

ところで、親が子どもを養護することによって子どもは順調に成長することは論を待たないが、筆者は以前より、親が子どもを養護するのに相応しい特性、いわゆる母性は生まれつきのものではなく、後々養護性となって表れる根っこの部分は全ての女性(人間)がもっていて、育てられる過程の様々な影響を受けることによりスムーズに開花したり、否であったりすると考えている⁽¹⁴⁾。そして母性がどのようにはぐくまれ、引き出されるかに関しては、松本の仮定した発達プロセス⁽¹⁵⁾を参考にしたいと思う。

松本は、乳児期の母親とのスキンシップや幼児

期の家族や友達との人間関係によって芽生えた思いやりの心が土台になって母性意識が芽生える。妊娠や出産を経験して次第に母性のイメージが強められた母親は、実際に子どもを育てながら、また父親をはじめとする周囲の人々に支えられながら、母子相互作用が自然に行われることにより、母性意識や母性行動が形成されていく。そしてその子どもも、母親をはじめとする家族や友達との人間関係の中で思いやりの気持ちが育ち、母性の基礎が形作られると考えたのである。したがって、乳幼児期の母子相互作用は子ども自身の発達にとって不可欠であるのみでなく、母性の発達にとっても大切なのである。

ところで、この乳幼児期の母子相互作用は生後突然発生するのではなく、子どもが生まれる前の妊娠期・周産期から存在しているのである。筆者は講義の中で学生たちに、妊娠中の母親の心理過程を説明し、母親の精神状態が胎児の成長に影響を与えること、母親自身も子どもを育てることにより親として成長すること等を概説し、胎生期、乳幼児期における親子の相互作用の重要性を説いている。

A 大学において胎生期の母子相互作用を講義した日のミニレポートには、「胎児は母親の気持ちや感情に敏感である。母子関係は生まれた赤ちゃんから始まると思っていたが、胎生期から始まるとは思いませんでした。」「妊娠中の母親のストレスが子どもに与える影響はよく考えると不思議です。母子関係はとても神秘的だなあと感じ、感動しました。」「心理学でいろいろ学んで、親になるなんてこわくて無理!と思っていたけど、子どもによって親として自覚させられるなら私も親になれるのかなと思うことができた。また私の母親が私によって親として成長してきたんだと思うと不思議な気がする。」「親子の絆がいかに早い段階でつくられるかということを知り感動しました。本当に親子は不思議だなと思いました。」など素直な感想が書かれていた。

これらの感想は、大学生というまだまだ感じやすい年齢で母子相互作用の神秘にふれることの意義を示唆しているのではないだろうか。このような原初的な感情を抱くことにより、次世代を大切に思う心も生まれるものと考えられる。

IV おわりに — 次世代を育成するために

親子関係について学習することは高校までのカリキュラムの何処かに存在していたと思われるが、Ⅲ(2)の学生たちは、母子の相互作用の重要性を初めて学んだと記述している。青年期の発達課題としては、これまで主に彼ら自身が育まれてきた大人から独立することに重点がおかれてきたと考えられるが、上記Ⅲ(2)に示したように、母子の相互作用の重要性等人間が育つ営みについて学ぶことで、これまでの自分を振り返り、育ててくれた世代への思いも生まれるのである。それぞれの発達段階で自分より幼い者・年齢的に下の世代に思いを馳せ、これから歩いていく世代にも思いを馳せることにより、上述の松本の図式に示されたような養護性・次世代育成力が生まれ、またこれから歩いていく世代を大切に思う気持ちも育まれるものと思われる。

高齢社会に突入した現在、人間の生涯は長くなり、様々な年代間のふれあいが発生するのが自然な状況であるはずにもかかわらず、現実には全くその逆で、世代間の交流は乏しく、意図的に設定しなければならない状況にある。子どもの状況のおかしさが指摘されて以後、子どもと老人、中高生と子ども間の交流の場はもたれるよう努力がなされているが、中高生と大人世代のふれあいはこれまではほとんどみられず、Ⅲ(2)で引用したように試みは始まったばかりである。生涯に亘るそれぞれの年代でのかかわりあいの他、小中学校の教科にはない心の教育や法教育、職業教育、そして親教育等々、長い人生のためにさまざまな事柄を学習する時代になったと言えるが、それらはいずれもよりよい人生のために、また次世代を育むために必要なことである。たとえ幼児期であっても絵本を通して学ばせることは可能であろう。どの年齢であってもその年齢なりに理解できるように示し、入り口を示しておくことに意味があると考え。

これらの試みが体系化された教育や学習の機会を整備することが長い目でみて本来の次世代育成に結びつくものと思う。

【注】

- (1) 日本教育社会学会編 1998 学校は病んでいるか — いじめ・不登校問題を考える —

教育社会学研究代 62 集 シンポジウム報告
東洋間出版社

- (2) 拙稿 2005 次世代育成支援時代における保育所の役割 名古屋柳城短期大学研究紀要 第 27 号 17-24
- (3) 長島貞夫 1978 体も心も病んでいる子どもたち 児童心理臨時増刊 特集教育と家庭 金子書房
- (4) 鈴木聡志 2006 「ふつうの子」が問題を起こすとき — 教育言説の歴史から 児童心理 No. 835 特集「ふつうの子」の悩みに気づく 金子書房
- (5) 全国保育団体連絡会・保育研究所(編集) 2005 保育白書 2005 年版 ひとつなる書房
- (6) 前掲書(5)
- (7) 中日春秋 2006 8/7 中日新聞
- (8) 成山文夫・石川道夫編著 2000 家族・育み・ケアリング — 家族論へのアプローチ — 北樹出版
- (9) 前掲書(8)
- (10) 柏木恵子・大野祥子・平山順子 2006 家族心理学への招待 今、日本の家族は? ミネルヴァ書房
- (11) 前掲書(10)
- (12) 前掲書(8)
- (13) 中学生に体験講座 2006 8/24 朝日新聞
- (14) 拙稿 1994 母性を形成する要因について 高田短期大学紀要第 12 号 131-151
- (15) 松本清一 1986 現代の母性 母性衛生 27 (4) 658

【参考文献】

- 柏木恵子・大野祥子・平山順子 2006 家族心理学への招待 今、日本の家族は? ミネルヴァ書房
- 成山文夫・石川道夫編著 2000 家族・育み・ケアリング — 家族論へのアプローチ — 北樹出版
- 大日向雅美 2005 「子育て支援が親をダメにする」なんて言わせない 岩波書店
- 全国保育団体連絡会・保育研究所(編集) 2005 保育白書 2005 年版 ひとつなる書房
- 全国保育協議会編 2006 保育年報【2006】保育所が進める次世代育成支援 全国社会福祉協議会

Japanese Children Today and the Importance of Bringing up the Next Generation

Narita, Tomoko*

近頃さまざまな場面で「子どもが病んでいる」という言葉が聞かれるようになったが、現在を生きる子どもたちは本当に病んでいるのであろうか。またこの事態に対して我々はいかに対処すべきであろうか。近い将来子どもたちを保育・教育することになる学生たちのレポートは、彼らが、現在の子どもたちの状況は病んでいると言わざるをえないが、子どもが病んでいるというよりは、まわりの環境、中でも親が病んでいて、子どもを追い込んでおり、親・大人・社会を変えていくことの必要性、社会全体が子どものことを学ぶことの必要性を感じていることを示していた。以上の結果を考察し、子どもの現状と子育ての現状に対してこれまで展開されてきた施策を跡付けることにより、今後の児童福祉の課題は社会全体で支えあう体制の整備であることを示唆した。さらに、具体的に養護性・次世代育成力を学ばせる試みについて例示し、すべての世代における他世代についての学習や教育の機会を整備し、体系化することが長い目でみて真の次世代育成に結びつくことについて考察を加えた。

キーワード：病んでいる、子ども・子育て応援プラン、次世代育成力、他世代についての学習